

この人に
訊く

写真／田村泰男

河野 美砂子 さん

「二足のわらじ」を履くというのは、どんなことであれ大変なことである。

短歌の世界でいえば、斎藤茂吉は「医者」と「歌人」という

「二足のわらじ」を履いて、どちらにおいても大成した。

もちろん現代歌壇においても「二足のわらじ」を履いた歌人は多い。

が、「音楽家」で「歌人」という例は稀であろう。

それまでピアノリストを生業としていた河野さんは、

角川短歌賞という「歌人」としての登竜門をくぐって、

今、「二足のわらじ」に足をかけたところといえる。

さて、これからどんな一歩を踏み出してくれるのだろうか。

「角川短歌賞」を受賞されてのご感想からお聞かせください。

河野 もちろん光栄なのですが、本当のところ「これからどうしよう」という感じです（笑）。私にはピアノがありますので、賞をいただく前から「ピアノ」と「短歌」を両立させるのはやはり大変だなと思っていました。今回、「角川短歌賞」に応募したのも、締切り当日の二月二十八日でした。



央郵便局で、その日の消印をギリギリで押してもらって……。そんな状況で応募したものだから、受賞という結果にはどちらかといえば戸惑いもありました。

「受賞のことば」の中で、「俳句に対する憧れもある」と述べられていますが、河野さんは「俳句と短歌の違い」をどのように捉えていますか。

河野 短歌というのはおおまかにいえば「心情」というか「気持」を表現しやすいという感じがしていました。一方、俳句は「気持」というよりもっと「客観的」な表現形式というか……。だから俳句のほうが却って広がりが出てくるんですね。

いざご自分が作るという立場になったときに短歌を選ばれたのはどうしてですか？

河野 自分の気持を吐き出すためには、短歌のほうがずっと便利なんですよね。それまで作ったこ

その日の朝にはまだ応募しようかどうか迷っていて、河野（裕子）先生に「どうしましょう」と相談しようとしたら、あいにくお留守で、夕方にならないと戻られないとのことだったんです。「じゃあ、もうやめた」と思っていたら、夜の七時頃になって先生から「応募しておいてください」というファックスが来まして……。それからあわてて八十首の中から五十首選んで清書して、京都中

とがないわけだから、自分の気持や、見たものなどを題材に、最初の一、二年は、何でもいいから作ることができる。そういう時代が終わると、「今度は何を詠む？」となって作れなくなる。そうなのでも詠もうとすると、それまでの「自分」の知らない「自分」というのが見えてきて、面白いんですよ。

——俳句にはそういう面がない？

河野 俳句は、要するに方向が全然違うと思うんです。短歌というのは「エクस्पレーション」、つまり表現したいものが自分の内側にあつてそれを押し出すもの、それに対して俳句は「インプレッション」＝印象であつて、外から入つてきたものに対して自分が反応するような感じがする。それと似た関係が音楽にもあつて、シューマンなどに代表される「ドイツロマン派」は、すごく自分を表現する、内側から押し出す感じがあるんですが、「印象派」＝フランスのドビュッシーの音楽というのは外から入つてきた光に反応して作られたもの、という感じがあります。

——短歌と「ロマン派」、俳句と「印象派」に共通点があるということですね。

河野 あくまでも傾向としてですが。

——では、その「印象派」的俳句に対する憧れとはどういうことになりますか？

河野 俳句のほうが言葉が少ない分「懐が深い」というか、読み手のとりようによつて、いろんな

ふうに解釈できる広がりを持つていると思うんです。でも、私には今のところ本格的に俳句を作ることはできませんね。短歌を始めた頃の歌会で「立葵^{あおい}」が詠まれた歌があつて、「すみません、私その花知りません」と言つたくらい植物の名前に疎^といんです（笑）。だから季語がネック。小さい時から今まで、ピアノ、ピアノで他のものを見ないようにしてきたことを残念に思います。

——では逆に、俳句と比較しての短歌の面白さとはなんでしょう？

河野 「リズム」と「音」の問題があります。俳句の五・七・五というのは音数上シンメトリックになっているでしょ？ たとえば西洋の音楽や建築物にはシンメトリックなものが多い。ところが日本古来のものはシンメトリックではなくて、少し歪^{ゆが}んでいるところがありますよね。そこが魅力なわけですが。それから五・七・五・七・七の中にある三回の七は、たとえば二十五^{フタヒトツ}、三十四、四十三、五十二のようにさまざまな変化が考えられる。あるいは韻を踏むということ。自分でも時々「あつ、私は音とリズムで作つているな」と思うことがあります。

——言葉ではなく「リズム」で捉えるというのは音楽で育つた河野さんならではのですね。そういえば河野裕子さんも「さんざんばらん」の歌に見られるように「リズムのある歌」を作られていますね。

河野 そうなんです。短歌界のことを何も知らないときに「女流短歌」という本を買つてパラパラと見て、「あつ、この人の歌好き」と思つたのが河野裕子先生でした。「内容」よりも「音」で好きだったんです（笑）。

——もうひとつ短歌の特殊性ということですが、短歌は短い詩型の中に「その歌の作られた背景」とか「作者の背景」とかを追いたくなくすることがありませんか？

河野 そうですね。「群れ」として何首かをまとめて読んでみると、一首だけ読んで「なるほど」と感じたことが、違う意味となつて立ち上がつてくるといふことがありますね。十首あつた場合、一（首）十一（首）……二十ではなくて、それが二十、三十、場合によっては五十になる力があると思ふんです。それを最初に感じたのは、香川ヒサさんの『マテシス』という歌集を読んだときで、香川さんの歌は一首だけを読むと「無機的」なのですが、歌集を通してまとめて読むと独特の世界がはつきりと浮かび上がるんですね。そのとき歌集の持つ力というのをすごく感じました。

——そういうところは俳句には薄い？

河野 俳句のほうもつと独立してますからね。——ところで、河野さんは発表することを前提に短歌を作り始めたのですか？

河野 最初は新聞投稿から始めました。作つて応募して、掲載されると喜んでいました。それで一

年半くらいやっていました。

—— そのころは短歌に対する知識はどの程度身につけられていたのですか？

河野 もう全然何も知りませんでした。なにしろ五・七・五・七・七になれば一首という感じで、「一年で千首」それで「毎日新聞」をはじめ「朝日新聞」「京都新聞」など各紙に投稿しました。

「数撃ちやあたる」(笑)と思って。だから選者の方がどういう人なのかも知らなかったんです。

ただ「毎日新聞」の選者で一人だけ女性だったのが河野裕子先生で、私と同じ名字——本日は先生はカワノ、私はコウノで違うのですが——ということだけで「河野裕子選歌欄」に投稿したんです。とにかく新聞投稿欄がなかったら私は短歌など始めてなかったかもしれません。

—— ちなみにNHKの「趣味百科 短歌」番組にも投稿されたことはありませんか？

河野 出しましたよ(笑)。一度岡井(隆)先生に佳作で採っていただいて放送してもらったこともあります。あとはテキストに何回か掲載していただいたことも。

—— プロフィール上では、そうして作り始めてから一年後に「塔」に入会されていますが、どういうきっかけがあったのでしょうか？

河野 偶然京都でやっているカルチャーセンターで、その河野先生と、光田和伸先生が月一度ずつ教えていらつしやるクラスがあったので、「それ

なら行ってみましょうか」ということで、入会したんです。ところが、その教室に来られている人たちがすごいんです。そこで私は鍛えられたんですね。教室が終わった後に、皆で食事をしたり、お茶を飲んだりするときの雑談の中からも学ばせてもらいました。そのメンバーの中に「塔」の方もいらつしやって、自然と「私も『塔』に入ろうかな」となったわけです。

—— 結社に属しながらカルチャーセンターで先生に教えていただくという構造の意味するところがちよつとわからないのですが。

河野 それは結社に入っている、それだけでは主宰——「塔」でいえば永田(和宏)先生や、河野先生とはそんなに接触できないから。結社の先生方に直接指導を受けることができるのは、むしろカルチャーセンターのほうなんです。

—— では「塔」の歌会というのはどういうふうに行われているんですか？

河野 私が出席する歌会は、「塔」の中でも始めてまだ日が浅い人が多いのですが、あらかじめ提出しておいた歌を無記名で印刷したものが配られて、良いと思う歌五首をそれぞれが投票するんです。そしてその後に「この歌はここが良い」とか「ここが悪い」というのを出席者が言っていくという形式です。

—— 自分の歌が何点もらえるかということでも鍛えられるし、人の歌を批評することで鑑賞眼を

も養うというわけです。

河野 高得点歌が必ずしも良い歌とは限らないのですが……。ただ批評というのはとても大事だと思います。最初はたとえば「良い歌」と思っても「何が良いのか」がなかなか言葉では言い表せないんです。それが人が批評するのを聞いていうちに「あつ、そうか、こういうふうに言えばいいのか」というようにだんだんと言えるようになってくる。あと、「塔」誌上に何度も評を書くことによって書くほうでも鍛えられます。

—— そうして本格的に歌を作られるようになった河野さんにとって影響を受けた歌人、あるいは好きな歌人というのとあなたになりますか？

河野 うーん、やはり最初に出会った河野裕子先生は、今身近に接して、あの集中心というか、しつこさ(笑)に頭が下がります。それから葛原妙子も「すごいな」と思う。あとは岡井先生や塚本(邦雄)先生も、傾向は違いますが「すごい」と思います。若人では紀野(めぐみ)恵さんと穂村弘さんが魅力的だなと思うし、まだ、いろいろ目移りしてしまつて……。皆すごいです(笑)。

—— ピアニストである河野さんの場合、ピアノを弾いているときに歌が閃くということもあるのですか？

河野 いえいえ、少なくとも大きなリサイタルがあるときなどは短歌のことはまったく忘れて練習しています。ただ小さい演奏会などのときには練

習中でも、パツと閃くというか、思うことがあるのですが、そういうときは練習に身が入っていないですよ(笑)。

——ということは、ピアノと短歌はきっちりと分けている？

河野 そうですね。ピアノのときには短歌のことは忘れて、逆に短歌を詠まなくてはならないときにはピアノのことは忘れるという感じで。一種の自転車操業(笑)。

——今回の受賞で、周囲はこれまでのように「ピアノリストの河野さんが作る短歌」というだけでなく、たとえば「歌人の河野さんが催すピアノリサイタル」という見方も出てきて、河野さんの歌人としての活動にも期待が高まるだろうと思うのですが、ご自身はどのように考えられていますか？

河野 私自身は「なるようになる」と思っています。私ですよね。自然の流れに任そうと。もちろんピアノをやめることはあり得ませんが。永田和宏先生も歌人と科学者という「二足のわらじ」を履いていらっしやるわけですが、先生いわく「二足のわらじというのはやっぱ大変や。でもそれがプラスになることはある」と。夜九時過ぎに歌会が終わったあと、夕食のパン一個をかじりながら研究室へ戻られるのを見ると、私も、「シンドイ」とは言えなくて。

——最後に河野さんが考える短歌上達の秘訣とは？

河野 「ヘンに上手になったらアカン」と河野先生はおっしゃいます(笑)。ただひとつ言えるのは、「短歌とはすばらしい詩型です。私はこの詩型を信じて作っています」というよりは「何かこの詩型ってちょっと変じゃないの？」というように疑問をもって作るほうが「力」になるというように自分では思っています。疑いながら、それで

も選ぶ、というときに強くなる。——本当は、短歌に出会ったのは「天の声」だと思っているんですが、これからどんな私に出会えるか、楽しみでもあり、怖くもある(笑)というところです。



自選歌五首

カレンターにクレーの線が伸びて
るる三月は水曜からはじまる

雨ほそく降る日の夜をとほりぬけ
螢の川へ君を連れだす

通り雨の多い街なり橋の上は鏡文
字読むやうなほるけさ

曇り日の日輪あぶらのごとく浮き
両手に握りなほした鉄棒

部屋の暗さが空とつりあふ時刻な
らながしつばなしの水あふれたり

河野美砂子(こののみさこ)

一九五六年、京都市生まれ。京都市立芸術大学音楽学部(ピアノ)卒業後ウィーン等に留学。八十四年に帰国後、演奏活動開始。八十八年淡路島国際室内楽コンクール優秀賞。九十一年より短歌を始め、九十二年「塔」短歌会入会。九十五年第四十一回角川短歌賞受賞。